

医史学と私

田中助一

私は昭和五年四月に日本大学専門部医学科に入学し、六年の春休みに郷里に帰省し、ある日母校山口県立萩中学校の構内にあった山口県立萩図書館（明治三十四年二月開館の郡立図書館）を訪れたところ、中学校で地歴を習った香川政一先生が退職後司書になって居られた。先生は私が医学校に入学したことを喜ばれ、「山口県には軍人や政治家のことを書いたものは多いが、医者のことを書いたものがないので、君は医学史を研究してみてもどうか、永富独嘯庵や賀屋恭安や青木周弼などの名医がいる。大村益次郎も小郡付近の医者の子である。東京には『日本医学史』という本を書かれた富士川游という先生が居られるので、話を聞きに行くと良い」とすすめられた。

香川先生は、私が中学三年の時（大正十五年）私の生地の郷土史を研究することをすすめられたことがあった。

私は「何か参考書がありますか」とたずねたところ、「あまりないが、さしあたりこれを読んでみたら」と言われて、『列伝体防長人物史』という小冊子を貸して下さった。その中に数人の名医の略伝が書いてあった。それから東田町の田北信一医師が藩医の子孫で、昔のことが詳しいと聞いたので話を聞きに行った。その時の話に旧藩医栗山家の資料が多くあつて整理されたことであつた。

新学期になって上京し、ある日紹介状も持たず富士川先生を麴町区内幸町二丁目の東拓ビル四階の中山文化研究所に往訪した。当時日大の先生方の中には学位を持って居られない方が何人も居られたのに、富士川先生は、医学博士と文学博

士と二つも持って居られるので、堂々たる方であろうと想像していたところ、頭を丸刈りにし眼鏡をかけられた朴訥な老人が出て来られて、「私が富士川です」と挨拶され、テーブルの上に置かれた、綴じ糸の切れてバラバラになった『日本医学史』をめくりながら、永富独嘯庵や賀屋恭安や青木周弼等の名を挙げられた。それから「毎月ここで会をしますから都合が良かったらお出なさい」と言われ、それから毎月葉書の通知状が送られて来るようになり、そのまま会員となり今日に至っている。この最初の面会日が不明確である。

昭和六年の夏休みには、私の家が医者でないので、少しでも早く医学の雰囲気慣れるために萩町瓦町の玉木病院（内科・外科・産婦人科、第五高等学校医学部卒、玉木亟輔院長）を見学した。父が院長と懇意であったのである。病院の隣りにある玉木家の本宅は旧藩医鳥田良岱・圭三父子の旧宅であり、亟輔氏の養父英三医師が良岱の弟子で、旧宅を譲り受けられたのである。玉木院長は、東京市豊島区雑司ヶ谷に住んで居られた圭三氏の長男、多門医師（第一高等学校医学部卒）に御紹介下さった。

多門氏は大変喜ばれ、二代鳥田智庵貫通の自叙伝の原稿や、いろいろな参考資料や古写真等を見せて下さり、さらに良岱の高弟で、杉並区西荻窪に住んで居られた有名な陸軍軍医監落合泰蔵氏に御紹介下さった。

これより先、私は中学校時代の国漢作文および東洋史の担任の河野通毅先生から、同じく国漢作文の担任であって郷土史に精通して居られた安藤紀一先生が、日本医史学会理事長であった呉秀三博士の要請によって昭和五年三月発行の『中外医事新報』第一一五七号に発表された「栗山孝庵のこと」と題する論文の別冊を送られていて、その中に萩藩医栗山孝庵の解剖図巻其他が、大阪在住の萩出身実業家井上清介氏が所蔵して居られることを、東京帝国大学教授長与又郎博士が御存知らしいので、長与博士に問い合せたところ、現在は博士の弟子である大阪市北浜四丁目居住の高村庄太郎博士が譲り受けて居られるとの御返事であった。

一方、富士川先生に大阪にある永富独嘯庵の墓の所在を問い合せたところ、昭和七年三月十四日御認の手紙で、天王寺

上宮中学校付近の蔵鷹庵にあることを教えられた。そこで同月十九日夜東京を出発、二十日九時三十分大阪駅に下車、独嘯庵の墓に参詣し、次いで高村博士を往訪して栗山家関係の資料を拝見した。

春休みが終り、四月九日上京の途につき、十日京都駅に下車し、金閣寺、北野神社、嵐山等を見て廻ったが、その際北野神社近くの太秦の二男の家に寄寓して居られた安藤紀一先生を往訪し、いろいろ話を聞いた。

昭和八年の春休みの数日、大井町にあった産婦人科城南病院を見学した。院長林敏郎博士は、徳山中学校から五高・東大をへて浜田病院の副院長を務められた方であつて、日大の三年先輩の角南正郎氏が日赤勤務のかたわら宿直医をして居られた。林博士は私の医学史研究を激励して下さり、「私が徳山中学校で国漢を習つた富田武一先生（志土白井小介の娘婿）が毛利公爵家の記録課に勤めて居られるから是非会いに行きたまえ、そして論文が出来たらなるべく早く雑誌に発表するがよい」と言われたので、富田氏に面会し、記録課長時山弥八氏に御紹介下さつた。

こうして最初の原稿「烏田智庵と其の医系」は、不備ながら昭和八年九月日本医学史学会機関誌『中外医事新報』第一一九九号にのせていただいた。

また同年九・十・十一・十二月発行の日本性病予防協会機関誌『体性』に「永富独嘯庵伝補遺並に小田亨叔と敬業館創建に就て」をのせていただいた。この方は日本皮膚泌尿器科の助教授官野英利先生が、東大皮膚科にあつた事務局に私を連れて行って頼んで下さつたのである。

これらの別刷と掲載誌を外科学教授田代信徳博士に贈呈したところ、「学生で専門雑誌に出したことは感心だ、君は僕の先生方の話を聞いて善いことをしている」、とおほめの言葉をいただいた。

昭和九年三月日大を卒業して日本赤十字社病院耳鼻咽喉科に入局したが、本業のかたわら医学史の研究は続けた。

医局に治療主幹岡部剛二博士所有の『日本耳鼻咽喉科学全書』が置いてあつたので見ると、第一巻第一分冊の日本耳鼻咽喉科史に、日本赤十字社病院耳鼻咽喉科は日本最初の専門クリニックであることが書いてある。当時病院では創立五十

周年記念事業として、専任の文学士を委嘱して初代院長橋本綱常博士の伝記と、病院五十年史の編纂が行われていた。そこで事務主幹に会って病院史の内容を聞いてみたが、各科の歴史は書かれないということなので、私は岡部博士に「耳鼻咽喉科だけのことを別に書いてみたい」と申し出たところ、「是非やってみよう」と申された。こうして在院中には主として日本解剖学史と日本耳鼻咽喉科学史の二本建てでやっていた。そして雑誌にのせたものは次の三編である。

「山上兼輔伝」（昭和十三年三月一日『耳鼻咽喉科』第十一巻第三号）

「読書家としての橋本綱常先生」（昭和十三年三月一日『チバ時報』第九五号）

「日本赤十字社病院耳鼻咽喉科略史」（昭和十三年十二月『内外治療』第十三年十二月）

昭和十三年四月二日第十回日本医学会第一分科会（日本医史学会）が京都の第三高等学校で開催されたので、「江戸時代に於ける解剖の事蹟及び文献に就て」と題して発表した。この会で中野操博士はじめ関西の研究者を知った。それから杏林温故会の機関誌『医譚』にも寄稿するようになった。

これより先、昭和十二年十月三日より二年間、私は九大名誉教授久保猪之吉博士の主宰して居られた月刊『耳鼻咽喉科』編集の手伝いをして、御夫妻より好遇を受けていたが、博士は十四年十一月十二日に数え年六十六歳で逝去されたので、同月二十五日発行の『医事公論』（第一四二六号）に「久保猪之吉先生と医史学」と題する弔文をのせた。

同年七月十一日日本赤十字社病院を退職し、同月十七日母校日本大学駿河台病院小児科（主任教授中村政司博士）に入局していた。

同年九月のある日だったと思うが、世田谷区代田二丁目に住んで居られる郷土の大先輩で、防長史に造詣の深い村田峯次郎氏（有名な村田清風の孫、著述家）を往訪し、「来年は萩に帰るつもりです」と言ったところ、村田氏はかねて熱望して居られた贈従四位青木周弼の伝記編纂のことをにわかに決意され、老年のため執筆を私に委嘱された。よって中村教授の御諒承を得て、隔日の午後高輪の毛利公爵家記録課に行つて旧藩記録を調査した。これによって私の防長医学史研究も

おおいに發展することとなった。そして未知の事項も明らかに became ことが多し。

十五年三月四日恒例の日本医史学会総会が神田区万世橋駅前の東京府医師会館で開催された。展示場の一画にかねて富士川先生の御諒承を得て青木周弼・研藏兄弟の資料を展示させてもらった。当日は特別講演に東京帝大教授文学博士宇野哲人氏が道教の話をされることになっていたが、忘れられて定刻を過ぎて来られなかったので、待つて居られる方々から苦情があり、困られた藤浪剛一先生から私に青木両先生の話をするように要請された。私は致し方なく無原稿で三、四十分話して責任を果した。宇野博士は後で来られ、食事をしながら話された。

『青木周弼』は十五年七月までに脱稿したので、全部青木周弼先生顕彰会に引き渡して私は郷里に帰った。八月に富士川先生の校閲を受けて印刷することになっていたが、先生が発病されたので原稿は返され、同年十一月六日に御逝去になった。行年七十六歳であった。私は同年十二月十日発行の『医譚』（第七号）に、「富士川先生の急逝を悼む」と題する弔文をのせた。『青木周弼』は十六年十二月五日同先生顕彰会より刊行せられた。（五〇〇部限定）

十五年十一月十日皇紀二千六百年記念祝典の佳日を卜して萩市北古萩一区の旧村田医院で開業したが、間もなく萩市医師会長和田渉氏の来訪を受け、「萩市医師会で皇紀二千六百年記念事業として医師会史の編纂を決定しましたが、担当者村田清熊君が逝去したので是非後任を引き受けていただきたい」と熱望され、ついに引き受けて十八年八月二十日に『萩市医師会略史』を刊行した。

私は先に青木周弼伝を編纂した時、周弼の師能美洞庵も功績が多かったことを知ったので、昭和十六年陰曆五月二十九日が七十年忌に当るので、十六年六月五日『能美洞庵伝』を二百部自費出版し、萩市医師会の決議を経て、山口県事に贈位申請方をお願いに行ったが、「時期が適当でない」という理由で実現しなかった。

中央では帝国学士院が皇紀二千六百年記念事業として『明治前日本科学史』（全三十巻）の編纂をはじめた。そのうちの五巻は医学史に宛てられて居り、長与又郎博士が委員長になって居られたが、逝去されて稲田龍吉博士が後任となられ

た。

私は十七年六月十三日付の手紙で、山崎佐博士から耳鼻咽喉科史の編纂をすすめられた。しかし地方については資料を充分に見ることができないので辞退したのであるが、重ねて熱心におすすめ下さったのでお引き受けした。この原稿は出版まで長年かかり、三十九年三月二十日刊行の『明治前日本医学史』第四巻に収められた。

その前に私は一応長年書いていた『防長医学史』がまとまったのを機会に、二十四年九月から二十五年七月まで、母校日本大学医学部の研究科に入学し再び勉強をした。生理学教室（主任教授内山孝一博士）に籍を置いた関係で、内山先生や助手の石原明氏をよく知ることができ、教室にあった古医書も見ることが出来た。

『防長医学史』は五百部限定の予約出版として二十六年十二月二十日に上巻、二十八年七月三十日に下巻を刊行したが、萩市医師会（久保常美会長）では防長医学史刊行後援会を結成して出版を容易にして下さった。

昭和二十四年九月より二十五年七月まで東京に滞在していた間、余暇に三浦謹之助（内科、東大名誉教授）・芳賀栄次郎（外科、陸軍軍医中將）・平井政適（内科、陸軍軍医少將、元日赤病院長）・菊池循一（耳鼻科）その他医界の古老を歴訪して、耳鼻咽喉科に関する昔話を聞き、二十七年八月二十日発行の『耳鼻咽喉科』第二四巻第八号に、「日本耳鼻咽喉科学の草創時代（一）」を發表し、次いで十月二十日発行の第一〇号に「（二）」を發表した。

二十八年九月十日山口県医師会（熊谷蔵之允会長）より表彰を受けた。

三十二年八月十四日山口県立医科大学（松本彰学長）より医学史の講義を委嘱され、非常勤講師となった。これは微生物学教室の助教授吉井善作博士や教務主任の病理学教授細川修治博士の御高配によるものと思うが、その頃日本医学史学会の役員会でも、医科大学等で医学史の講義の要請があった場合にはなるべく引き受けてもらいたいという意向であった。こうして私は一年に四回位で、三年間宇部市に汽車で行った。

三十四年七月二十七日、萩市医師会は創立二十五周年記念として『萩市医師会略史』続篇を刊行した。

山口県医師会では早くから会史編纂の議はあったがなかなか実現しなかった。しかし三十五年四月二十四日に会史編纂を決議し、私を参与に任命された。当時はまだコピーが出来なかったので、字の上手な助手一人を付けてもらい、三十九年七月一日『山口県医師会史』を刊行した。

三十七年四月十五日発行の『耳鼻咽喉科展望』第五巻第二号に、「明治前日本耳鼻咽喉科学史脱稿まで」を發表した。
同年四月二十一日発行の『日本医事新報』第一九八二号に、「防長眼科略史」を發表した

三十八年一月二十日発行の『日本耳鼻咽喉科学会会報』第六六巻第一号に、「日本耳鼻咽喉科学会小史」を發表した。これは同学会が創立七十周年になるのを記念して私に委嘱されて書いたものであり、母校の中村四郎教授の御推薦による。その抜刷は同年四月三日大阪市で開催された第六四回総会で参列者全員に配布された。

五十一年十一月六日日本医師会（武見太郎会長）より最高優功賞を授けられた。

五十五年十一月七日山口市民館で日本医師会主催の第一回全国学校保健・学校医大会が開催され、武見会長の御指名により、「明治維新と防長の医家」と題する特別講演を行った。

五十六年六月十四日、山口大学医学部で日本耳鼻咽喉科学会山口県地方部会の第百回例会が開催され、「山口県と耳鼻咽喉科」と題する特別講演を行った。

同年八月十一日発行の『山口県医師会報』第九三七号に、「山口県の耳鼻咽喉科医師」を發表した。

五十九年十一月十日『山口県医師会史』第二巻を刊行した。このたびは六人の委員の分担執筆であった。

先に刊行した第一巻は部数が一二〇〇部で全会員の手に渡っていないので、補訂して六十年三月二十日に復刻した。
六十二年十一月二十八日、山口県医師会創立百周年記念として『防長医家遺墨集』を刊行し、全会員（一九〇〇人）に配布した。

私は昨年八月二十日まで約十年間、萩市南古萩に残っている青木周弼旧宅を補修して住んでいた。この家は明治二十五

年に青木周蔵子爵から安藤紀一先生が購入して保存されたものである。
先きに刊行した「防長医学史」(上下二巻)が稀覯本となつたので、一巻にまとめ、誤植などを訂正して、五十九年九月二十日東京の聚海書林より復刻せられた。

(日本医史学会評議員)